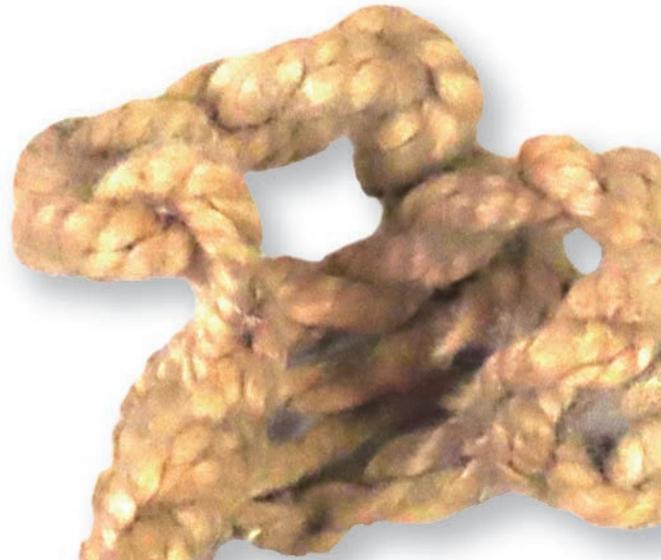


# MUSEUM NEWS

## 秋田県立博物館ニュース



### 新着収蔵資料紹介

#### 迷子札

氏名と住所などを彫った札です。子どもが迷子になった時の用心に親が持たせたものです。この資料の迷子札は、真鍮でできていますが、ちりめん細工や木などでも作られました。

写真の迷子札は、寄贈者の父親が子どもの頃に持っていたものです。

(縦 14.0 cm、横 4.3 cm)



### CONTENTS

- 01 表紙・目次
- 02-03 展示報告「大恐竜展」秋田
- 04 展示報告「深澤多市一郷土研究と真澄研究の偉業一」
- 05 学芸ノート（工芸部門）  
活動紹介「入館者400万人達成イベント」
- 06 学芸ノート（歴史部門）
- 07 展示予告「新着・収蔵資料展」
- 08 博物館の風景



恐竜は近年日本各地で化石が発見され注目が集まっていますが、これまで秋田県からは見つかったことはなく、当館での恐竜に関する展示は自然展示室の可変展示コーナーで行ったことがあるだけです。この度、秋田テレビ様から恐竜展を提案いただき大々的に開催することになりました。動く巨大ティラノサウルス、荒木一成氏のリアル模型、亀井由美子氏のクラフト恐竜模型、写真撮影スポットになるトリックアートなどバラエティに富んでいましたが、当初の案では化石資料はわずかでした。実行委員会での協議で館蔵の恐竜やアンモナイトなどの化石を加え、岩手県の恐竜化石と同時代の琥珀や植物化石を借用して展示することになりました。また、アロサウルスの大腿骨やアンモナイトに触れていただくことにしていたのですが、新型コロナウイルスの流行のため取りやめました。展示に加え、わくわくたんけん室では恐竜VR体験や化石探しなどのワークショップを開催するとともに、ロビーの一角に恐竜関連グッズのショップを特設しました。

夏休みの開催ということで、多くの家族連れで賑わいました。「料金が高い」などの厳しい意見もいただきましたが、「資料が近くて迫力があった」「子どもが動くティラノサウルスにクギ付けです」「いろんな恐竜を見られて楽しかった」「再入場可能なのがありがたかった」など満足された声も多く寄せられました。秋田市の小学校3年の担任の先生からは「何人かの子どもたちが夏休みの絵日記に恐竜展のことを描いていました」と伺いました。特に印象深かったのが、日を改めて2度入場された年配のご夫婦が「とても楽しくてまた来ました」とおっしゃったことです。『恐竜』は子どものみならず多くの方々を魅了することを再確認しました。期間中、臨時開館日を2日設け、のべ32,285名が入場しました。  
(地質部門：大森 浩)

**主催** 大恐竜展秋田実行委員会（AKT秋田テレビ、秋田県立博物館）

**企画協力** 株式会社マックエージェンシー



中生代の化石



ティラノサウルスの下顎と大腿骨



亀井由美子氏のクラフト恐竜



荒木一成氏のリアル模型



動くティラノサウルスロボット



骨格模型とリアルモニュメント



岩手県の恐竜化石コーナー



トリックアートを楽しむ幼児たち

# 深澤 多市

## — 郷土研究と真澄研究の偉業 —



### ◆展示概要

大正後期から昭和初期にかけて活躍した郷土史家・<sup>ふかさわたいち</sup>深澤多市。その功績は、秋田県関係の古書を整理してまとめた『秋田叢書』の公刊や、<sup>あきたそうしょ</sup>戦国時代に県南地域を領知した小野寺氏の研究などで知られています。こうした活動の多くは横手町助役など、官吏としての生活を送る中で行われました。また『秋田叢書』には菅江真澄の著作が多数収録されています。それはその後の真澄研究の進展に大きく寄与することにも繋がります。今回の企画展では多市の郷土研究と真澄研究の足跡について、幼少期から多市が学んでいた漢詩文や、官吏時代の人々との交流の様子なども交えながら、遺された多くの資料や刊行物などから紹介しました。



在りし日の多市の姿

### ◆展示構成

- 第1章 深澤多市の生涯
- 第2章 『秋田叢書』の出版
- 第3章 漢詩文の学び
- 第4章 官吏生活の中で
- 第5章 地域の研究
- 第6章 真澄全集編纂の試み



多市を模した中山人形(個人蔵)



「古人、吾を欺かず」の扁額(館蔵)

### ◆展示を終えて

- ・今回の展示は、令和2年に多市のご子孫から多くの資料を寄贈していただいたことに端を発します。これらの資料は多市の逝去後、夫人から四代に亘って大切に保管されてきた資料です。こうした貴重な資料を展示する機会を得ることができ、郷土の歴史を後世に守り伝えることに情熱を注いだ深澤多市という人物の半生について、掘り下げて紹介することができました。
- ・展示期間中、多くの方に足を運んでいただき、中には数時間かけて一つ一つの資料を熱心に見て行かれる方もいました。特に多市の生まれ故郷である美郷町や、助役を務めていた横手市などからは、地元史談会や研究会の方々が団体で来館されるなど、今なお郷土の誇りとして敬われている多市の姿を改めて知ることができました。
- ・現在、真澄研究に携わる多くの方が用いているテキストは、昭和46年から刊行され始めた、未来社の『菅江真澄全集』かと思います。そしてその底本の主となったのが『秋田叢書』でした。『秋田叢書』がなければ、今日の真澄研究の発展はなかったことでしょう。そして、その刊行は、多くの苦勞を伴いながら、最終的には多市自身が私財を投げうってまで成した一大事業でした。改めて多市の努力に感服しています。



秋田叢書の挿画に用いられた銅版  
(秋田県立図書館蔵)

(真澄部門：角崎 大)

# 人形の修理屋開業？

人形修理の始まりは今年の「美の國の名残」展に出品した仏像や館収蔵の八橋人形の傷み汚れを憂い、クリーニング、補修を行ったことによる。高じて視覚支援学校が所蔵する「塙保己一像」、今春の展覧会に出品された「深澤多市像」などの中山人形についても補修を行った。

専門家による修復が後世行われることを期待して、原状回復が可能な方法で取り組んだので、使用できる材料に限られる。農婦を模した「家路」は当館収蔵以前から左腕が欠損しており、復元作業は難しいものになった。

作業は湿らせた綿棒で表面の汚れを除去することから始めた。水干絵の具の膠分が所々弱くなっており、色落ちする部分があり慎重に行う。欠損部分は砥の粉に膠を混ぜ粘土状にしたもので充填した。左腕は充填用の砥の粉を乾燥させて成型し、膠で接着する。充填、接着の際にはみ出した砥の粉はミニルーターで研磨した。

農婦は鍬を担いでいるため、柄を通す穴を手にあけなければならない。この角度調整に苦労した。鍬はヒノキの木片と竹ひごで制作する。彩色は調色した顔彩を薄く塗って仕上げている。膠を接着剤としているので、水を使えば充填部分、彩色部分は簡単に除去できるはずだ。

まさか自分が人形の修理屋をすることになるうとは思いませんでしたが、これも美術教師である性かも知れない。「鎌倉権五郎」の矢、「雪ん子」のホンデキ棒などの小道具の出来にもほくそ笑んでいた。展覧会の裏方仕事もなかなか楽しいものなのである。

(工芸部門：山本 丈志)



収蔵時の調査



補修後 家路

## 入館者400万人達成！

秋田県立博物館は、秋田の自然や歴史について学ぶことができる総合博物館として昭和50年5月に秋田市金足地区の県立小泉湧公園内に開館しました。平成8年に「秋田の先覚記念室」と「菅江真澄資料センター」を増設し、さらに平成16年には「わくわくたんけん室」の新設を含むリニューアルオープンを経て現在に至っています。

こうした中、6月2日におかげさまで開館以来の入館者が400万人に達し、記念のセレモニーを開催いたしました。400万人目の来館者となられた方は、湯上市にお住まいの進藤さんご夫妻で、館からは記念品として特別展のペアチケットとオリジナルグッズのセットを贈呈いたしました。秋田市に住むお孫さんの家に向かう途中で当館に立ち寄られた進藤さんは、「気軽に立ち寄れる博物館が近くにあるのはありがたい」と笑顔で話されていました。記念撮影を行った後、小園館長が「400万人突破を励みに、さらに皆様方が来てよかったな、楽しかったな、と思えるような博物館を目指していきたい」と挨拶を述べました。

秋田県立博物館は令和7年に開館50周年の節目の年を迎えます。一層皆様にご満足いただけるよう職員一同気持ちを新たに努力して参りますので、これからも引き続きご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

(普及・広報班：藤原 尚彦)



## 2枚の城絵図に記された「多門」とは何か？

「多門といえば、<sup>たもんやぐら</sup>多聞櫓のことでしょうか？」

お城好きの方ならば、きっとこのように即答されることでしょう。多聞（多門）櫓とは、（本丸や二ノ丸などの）曲輪の外周に沿って、石垣や土塁の上に築かれた長屋状の建造物のことです。ところが秋田藩においては、多聞櫓以外を示すと思われる多門の用例を確認することができます。

当館所蔵の守屋家資料の中にある、「秋田郡大館御城絵図（以下、大館城図と略記）」がその一例です。この絵図は、文政4年（1821）に幕府の国目付へ提出する目的で作成されたものですが、秋田藩の支城である大館城の全域が描かれると共に、本丸から三ノ丸までの各曲輪の大きさや、堀の長さ・幅などの詳細な情報が書き込まれています。この絵図中の記事には、「一 多門七ツ」という一つ書がありますが、絵図には多聞櫓は描かれておらず、どこに築かれていたのか見当がつかえません（図1）。

実は同様の事例が、同年に同じ目的で作成された「出羽国秋田領横手城絵図（以下、横手城図と略記）」にも見られます。横手城とは、大館城と共に幕府から存続を許可された秋田藩の支城ですが、その横手城を描いた「横手城図」も、先ほどの「大館城図」と概ね同じ様式で作成されています。「横手城図」の記事の中には「一 多門拾壺、柵門弐ツ」という文言がありますが、ここで注目すべき点は、多門と柵門が同じ一つ書の中に併記されている点です。「横手城図」を見ますと、図2の通り神社の鳥居のような形態の門が2ヶ所に描かれており、これが柵門を示します。これに対し、屋根を葺いた門は横手城内の11ヶ所に描かれており、「多門拾壺」の記載と一致します。これを踏まえて改めて「大館城図」を見直す

と、7つの城門を確認することができ、「多門七ツ」という記載と一致します。そもそも多聞櫓とは、非常に高い防御力を有する建造物であり、通常の櫓ですら築かれていなかった簡素な作りの大館城や横手城に多数設置されていたとは思えません。従って、絵図に示された「多門」とは多聞櫓ではなく、城門のことであると考えべきでしょう。

この点について『横手市史』通史編近世には、「多聞櫓形式の城門」という見解が示されています（同書P.119）。確かに、櫓門のことを多門と呼んでいる事例は（石川県金沢城の鼠多門など）他の地域でも確認できるのですが、多聞櫓形式の立派な櫓門が横手城や大館城にこれほど多く設けられていたと見なすことには疑問を感じます。櫓門だけではなく、屋根や扉を有する城門を総称して多門と呼んでいたのではないのでしょうか。ちなみに、秋田藩によって編纂された『国典類抄』を調べてみても、天和2年（1682）の記事の中に、久保田城の「曲輪之御門」を指し示すと思われる「多門」の用例を確認することができます（『国典類抄』第10巻、軍部全、P.14～15）。

もっとも秋田藩においても、多聞櫓を意味する多門の用例が散見されることは付け加えておきます（その場合は「多門長屋」と書かれていることが多いです）。しかしその一方で、（柵門を除く）城門一般のことを多門と呼んでいたと考えられる事例が、以上の通り何件か確認できます。

この文章をご覧の方々の中で、他藩の事例も含めて、関連する情報をお持ちの方がいらっしゃいましたら、ぜひ当館までお知らせください。

（歴史部門：黒川 陽介）



図1 「大館城図」（城郭を中心にトリミング）  
一つ書の4箇条目（傍線部）に「多門七ツ」と書かれている。

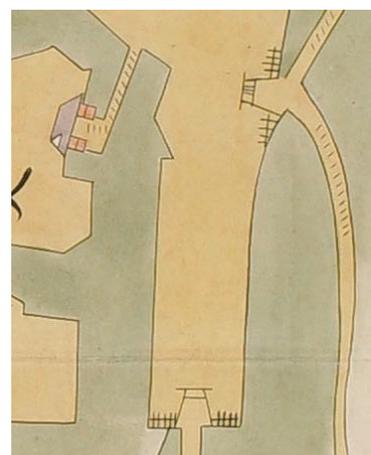


図2 「横手城図」（部分図）  
2種類の城門が描かれている。

# 新着・収蔵資料展

博物館では開館以来、収蔵品の収集を続けており、収蔵品の総数は19万点を超えています。受け入れた資料は、調査・研究によって価値や意義を明らかにした上で、企画展や常設展で活用されることとなりますが、あまり展示に向かない研究用資料もありますし、その時の展示のテーマに沿ったものが優先的に展示されますので、ただちに全部が公開されることにはなりません。しかし、

せっかく受け入れたものが長期間公開されないのは、大変もったいないことです。本展のような新着・収蔵資料展で、速報的なお披露目の機会を設けています。近年になって県博コレクションの「仲間入り」を果たした品々、普段は収蔵庫に眠っている「秘蔵っ子」が登場します。

(歴史部門：新掘 道生)

## 展示品から 秋田臨海鉄道資料

秋田臨海鉄道は、昭和46年（1971）から令和3年（2021）まで秋田市の臨海工業地区で貨物輸送を行った鉄道です。運河沿いにコンテナを連ねて列車が走る姿を見かけた人も多いことでしょう。閉業に伴い、列車の部品や運行用具などが秋田臨海鉄道株式会社から寄贈されました。今回は初展示となります。



### ヘッドマーク「惜別」

令和3年3月、営業運行の最終週、列車の先頭を飾ったヘッドマークです。

### DD56形ディーゼル機関車 社章プレート

初代社長の小畑勇二郎県知事の発案により、車輪をモチーフに秋田臨海鉄道の頭文字「A」をデザインしたものです。



### DD56形ディーゼル機関車1号機 車番プレート

DD56形ディーゼル機関車は、国鉄のDD3形をもとに製造された機関車で、昭和45年に納入され、翌年7月7日、臨海鉄道南線の開業初日の初列車を牽引しました。令和2年に廃車となり解体されました。

列車番号	種別	秋田	秋田港	秋田港	秋田
29	貨物	13:51	14:08	14:20	14:50
30	貨物	14:08	14:15	14:20	15:07
31	貨物	14:50	15:40	15:46	17:05
32	貨物	15:07	15:57	17:17	17:32

### 昭和47年の南線時刻表

開業翌年の時刻表で、輸送量がピークだった頃のものでした。

## 博物館教室



参加者が製作した、通称がなんと遮光器土偶のレプリカ♪



センスが光る参加者の作品



### 「初級編 北東北秋田の縄文を学ぼう」

石膏で遮光器土偶のレリーフや岩偶のレプリカ作りを体験！人文展示室で職員のご案内を聞きながら、縄文遺物の価値について理解を深めることができた1日でした。

### 「昆虫教室―採集と標本づくり―」

小泉潟公園で採集した昆虫の種類を調べ、標本の作成を行いました。講師に昆虫の種類を教えてもらいながら、丁寧に作業する参加者。

### 「名誉館長館話」

今年度前期は全3回にわたり、中世秋田の武将や佐藤信淵について講演いただきました。後期も2回開催予定です。

### 「化石と地層の観察会」

男鹿市安田海岸にて、地層の観察と化石の採集を行い、大地の生い立ちとその調べ方について学びました。

### 「木工芸 木のオブジェづくり」

桜やカシなどの木を丁寧に磨き上げていきます。蜜蝋を塗って仕上げれば、木目の美しい自分だけのオブジェに♪素敵！！

### 「綿を紡ぐ」

県立大学協力の下、綿の苗を自分で育て、収穫した綿から布を作る講座です。まずは布団綿で糸車の練習をします。糸に撚りをかける作業ですが、これがとても難しい…



## 展示・イベント



こどもの日にはこいのぼりを入館者をお出迎え♪



### 「ギャラリートーク」

企画展「深澤多市一郷土研究と真澄研究の偉業―」の展示解説会では、多くの方にお楽しみいただきました。

### 「大学生の博物館実務実習」

8月25日(木)から計6日間の日程で、実務実習を行いました。学芸員免許を取得するために県内外から10名の学生がエントリーし、実務を学びました。

### 「ふるさとまつり広場 コーナー展 「子どもの成長を願う～鹿島船～」

秋田県内で盛んに行われている鹿島流し。実際に使われた船を展示し、豊作祈願や船舶の安全祈願など、多様な意味について紹介しました。

### 「教員のための博物館の日」

県内各地の先生方が夏休みを利用し、博物館の利用法について研修を行いました。博物館の資料が教育活動にどう生かせるか、職員の話に熱心に耳を傾ける先生方。

### 「中堅教諭等資質向上研修」

勤続11年目を迎えた先生方による研修。自分の専門分野以外についても、興味深く受講されていました。



## 新型コロナウイルス感染防止の取り組みについて

- 新型コロナウイルス対応として、御入館の際にはマスク着用、手指消毒やサーマルカメラによる体温計測等のご協力をお願いしております。
- イベントや教室の最新情報につきましては、当館HPでお知らせいたしますので、事前にご確認ください。